

Chernobyl Children's Fund Japan チェルノブイリの子どもたち



Chernobyl Children's Fund Japan チェルノブイリの子どもたち NEWS No. 102 2015年10月17日発行
郵便振替口座「 Chernobyl Children's Fund Japan 」 00160-4-98316

～ 2015年夏 子どもたちの特別保養 ～

みなさまの募金のおかげで子どもたちを保養に招待することができました



★2016年 Chernobyl Children's Fund Japan カレンダー
お申込み受付中！

ウクライナ



ベラルーシ

★報告会「2015年夏 子どもたちの保養・ Chernobyl Children's Fund Japan と福島」 11/21(土) 13:30~16:00
会場:パルシステム東京新宿本部7F大会議室(東京都新宿区) 定員:50名(要・予約) 資料代 500円

<報告内容> *「 Chernobyl Children's Fund Japan の子どもたちの保養／ベラルーシ・希望」佐々木真理(Chernobyl Children's Fund Japan 事務局長) *「福島の子どもたちの保養／沖縄・球美の里」向井雪子(Chernobyl Children's Fund Japan 代表理事、未来の福島こども基金・世話人) *「ベラルーシの学校の放射線教育」小寺隆幸(Chernobyl Children's Fund Japan 理事) <共催> Chernobyl Children's Fund Japan 、未来の福島こども基金、生活協同組合パルシステム東京 <申し込み・問合せ先> Chernobyl Children's Fund Japan Tel/Fax,E-mail アドレスは16頁をご覧下さい。



放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2015年6月 ウクライナ／8月 ベラルーシ

ウクライナとベラルーシの子どもたちの保養が無事終了しました。汚染地区に住んでいる子どもたちにとって免疫力を高めることのできる保養はとても大切です。きれいな環境、安全で栄養のあるものを食べ、体を動かし、友だちと交流することは心身の健康回復に役立ちます。

ウクライナ

- 場所：サナトリウム「ゴルナヤ・ティサ」ザカルパチエ州ラホフ地区クワスィ村
- 期間：2015年6月7日～6月22日（14日間）
- 参加者：子ども23人（11歳～14歳／ジトーミル州ナロジチ地区）、引率者4人。
- 参加者の病名：慢性扁桃腺炎、慢性気管支炎、慢性胃炎、甲状腺機能亢進症、甲状腺過形成、胆道ジスキネジー、貧血症。

<引率者の感想> リュドミラ・Z（キエフの慈善団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」代表）「滞在中には、水圧マッサージ、温熱療法、運動療法など、それぞれの健康状態に応じた治療が行われました。サナトリウムの周りは小高い丘や川があり、毎日散歩に出かけました。また子どもたちは敷地内でゲームやスポーツなどで、思いっきり体を動かしました。また、バスで遠足にもでかけました。健康的な食事をとり、必要な治療を受けながら、美しい自然環境の中でのびのびと過ごすことで、体の不調が改善されたり、免疫力を高めることができます。子どもたちが住んでいるのは、チェルノブイリ事故による放射線汚染のため、保養の権利のあるところです。しかしこの子どもたちには今年、国

予算による保養は行われません。国の予算による保養は、障がいのある人たち（それもとても小規模）以外はなくなっています。これはロシアとの戦闘が大きく影響しています。引率者として参加した別の女性は次のように言います。

「保養はあつという間に過ぎ去りますが、限られた期間の中でも子どもたちは体力、気力を充実させることができます。子どもたち、子どもの両親や祖父母を代表し、そして私個人として、チェルノブイリ子ども基金のみなさまと全ての支援者のみなさまに対して御礼申し上げます。来年の保養の時期までには、この呪われた戦争が終わり、保養に参加した多くの子どもの父親たちが、今戦っている戦場から無事に子どもたちのもとへと戻っていることを願っています」

<子どもの感想> ■マッサージ、塩の部屋の治療を受けた。食事はとてもおいしかった。いろいろな場所に遠足に連れて行ってもらって楽しかった。

（アンドレイ・10歳） ■お医者さんやスタッフがみんな優しかった。よい治療を受けることができた。山の景色、空気がとてもよかったです。とても楽しい保養ができた。（アルチョム・11歳） ■体に良い飲み物や新鮮な果物、肉料理、野菜サラダなど、みんなとてもおいしかった。部屋のベランダから見える山の景色はとてもきれいだった。このような素晴らしい保養をさせてくれたことに心



から感謝します。（ナースチャ・12歳） ■マッサージを受けた後、とても体調がよくなつた。食事はおいしく、部屋はいつもきれいに掃除されていた。施設のスタッフはみな親切だった。敷地内の広場でサッカーやバレー、ボールなどで遊んだり、近くの川で遊んだりして楽しかった。こんなに素晴らしい休暇をありがとうございます。（マリーナ・13歳） ■素晴らしい2週間を過ごした。日本のみなさんありがとうございます。来年は私の友だちもここに来られたらいいなと思う。（ヴィーカ・12歳）

ペ ラ ル ー シ

■場所：子どもリハビリ・健康回復センター「ナデジダ（希望）」ミンスク州ビレイカ地区

■期間：2015年8月3日～8月26日

■参加者：子ども34人（8～17歳／ゴメリ市、レチツア市、ブラーイン市、モーズィリ市、ジロービン市、及び周辺の村）、引率者2人。

昨年まではゴメリからバスで直接ナデジダに行きましたが、今回初めて列車でミンスクに、そこからナデジダまでバスで移動しました（子ども基金の資金難によるものです）。往路、ゴメリの団体の代表者もナデジダまで引率しました。駅では列車からバスまで子どもたちの荷物を運ぶのをナデジダの職員が手伝いました。

参加者のほとんどは、これまでに何度もナデジダに来たことがあり、初めて参加したのは7人でした（日本の里親から支援を受けている子どもも多く参加）。初めての子もすぐに友だちができ、ナデジダの生活に溶け込みました。引率者、ナデジダのスタッフ、心理カウンセラーたちは、子どもたちの生活全般に気を配り、子どもたちは安心してのびのびと過ごすことができました。大きい子たちは自ら小さい子たちの面倒をみました。8歳、9歳の小さな女の子たちが抱きつかれ、背の高い17歳の男の子は「僕にはもうこんな大きな



子どもができちゃったよ」と笑っていました。消灯前、小さい子どもたちの部屋で絵本を読んであげている年長の女の子もいました。

医師による診察は、到着後、保養の中ほど、保養の最後の3回行われます。最初の検診でそれぞれの治療が決められ、途中でその効果を確認し、その先の治療を決めます。最後の健診結果は持ち帰り、親や地元の病院の医師に伝えられるようになっています。午前中はそれぞれの治療、午後は

クラブ活動（陶芸、絵画、手芸、木工細工、音楽など）に通ったり、保養所全体の催し物（コンサート、ゲーム、コンクール、スポーツ大会）などに参加します。子ども基金スタッフによる書道教室・くみひも教室も行われました。3食の他に軽食（果物、ジュース、ヨーグルトなど）が3回あります。夜は映画観賞とディスコ（体育館で音楽を流し、小さい子から大きい子まで一緒に踊ります）が交互に行われます。

保養中、ミンスク市の児童がんセンターへ定期検査に行く子が2人いました。グループの引率者が同行し、ナデジダの車で往復しました。病院では子どもの両親が前もって来ていて、診察の順番をとっていたおかげで、待ち時間は短くてすんだといいます。幸いなことに検査の結果は異常なしでした。

＜副所長・小児科医：イレーナ・N＞ 毎年このプロジェクトに参加している子どもも多く、彼らの成長する姿を見られるのは個人的にもとてもうれしい。彼らは同時期に滞在していた他のグループの子たちと違い、みんな深刻な病気を抱えているにも関わらず、どのグループより結束としても積極的にいろいろな催しに参加し、ほとんど1位か2位をとった。その前向きな姿勢は大変素晴らしい。＜以降はイレーナの説明。括弧内は保養中に受けた治療。＞●クリスチナ：足のむくみがある。免疫力の低下はリンパ腺にも影響を及ぼしているのではないか。（ジャグジー、マッサージ治療） ●ダーシャ：大変体

が弱く、この1年で3回も入院した。頭痛、低血圧。毎日血圧を測定。保養中に熱中症で頭痛が起きた。風邪気味で咳も出たが薬でよくなつた。（マッサージ、岩塩治療）●オクサーナ：ほぼ毎日頭痛を訴えた。鎮痛剤。（アロマテラピー、薬草茶、炭酸乾燥サウナ）●カーチャ：ビタミン剤を服用。生まれつき皮膚の問題。●ウラディーミル：頻繁に喉の痛み（岩塩治療、吸入治療）●ナースチャ：咳が頻繁に出る。（吸引治療、マッサージ、アロマテラピー、ジャグジー）

<引率者：アレーシャ・N>

（ゴメリ市の小学校の英語教師）自分はゴメリに住んでいるが、ナデジダに着いてすぐ環境のよさを実感した。普段は頭痛がひどく痛み止めが手放せないが、ここでは全くそ

れがなかった。娘はよく熱を出したり学校を休んだりするが、ここでは最後まで体調を崩すことはなかった。ゴメリの環境がいかによくないのかわかつてしまった。あそこで子どもを住まわせ続けてよいものなのかと真剣に考えた。自分の双子の姉妹（※）は子どもの頃甲状腺がんを患った。当時はその病気が多かったが、今の子どもたちの病気は様々だ。チェルノブイリ事故から29年もたっているのに、一体この子たちの病気はどこから来たものなのかと恐ろしくなる。ここは自然環境だけでなく、施設の設備と、職員の対応が素晴らしい。娘が学校から行



った保養所は子ども用の催し物がほとんどなく、設備も対応もよくなくて、体調を崩して帰ってきたくらいだった。

自分の夫は放射能に全く無頓着。いくら説明しても理解しない。今の子どもたちは学校で少しは放射能のことを勉強するが、私たちの時は何も教わらなかつた。身近に病気になつた人でもいなければ、知らないでそのまま大人になる人も多い。夫は汚染地区の川で釣ってきた魚を

自分や娘にも食べさせようとするので、それはとんでもない！と強く拒否している。彼になんとか危険性を理解させたい。今回参加した子どもたちの病気のことを話してみたいと思う。

（※2012年4月に子ども基金が日本に招き、講演をしたオリガさんと双子）

<子どもの感想>■毎年参加しているので第2の自分の家に戻ってきたみたい。友だちと会えてうれしい。日本のみなさん、ありがとうございます。（ヴィーカ・14歳）■手芸教室では飾り物を作り、書道教室で漢字を書いた。仲間と参加したバレー大会で優勝してうれしかつた。将来は医師になりたい。（ナースチャ・14歳）■保養に招待してくれた日本の皆さんに感謝します。僕はもうすぐ18歳になるのでもうこの保養には参加できません。可能なら来年自分で費用を払ってでも、子どもたちの世話係として参加したい。

（ディーマ・17歳）■ジャグジー風呂は電気が点いたり音楽が流れたりして楽しかつた。お医者さん、看護師さんはみんな優しい。絵を描くのも楽しかつた。（ボグダン・8歳）■英語の勉強なんて意味がないと思っていたけれど、僕たちの引率者が外国のお客さんと英語で話しているのを見て、僕もそなりたいと思った。これからは英語をちゃんと勉強しようと思う。（ボーバ・15歳）■初めて参加。毎日楽しくて（特にディスコ）家を恋しがる暇がなかつた。来年もまた来たい。（マーシャ・9歳）■僕は初めて舞台の上でみんなの前でシンセサイザーを演奏した。（ルスラン・8歳）



～ナデジダの今後について～

子ども基金は、ナデジダの設立当初より運営費や、医療機器や医薬品、施設の建設費・補修費の一部、クラブ活動の道具、年間保養費の数%を支援してきた。また、毎年夏にはそこで子ども基金の保養プロジェクトを開催してきた。今年9月で設立21年を迎えたナデジダの現状と今後について、マクシンスキーソ長の話を聞いた。

ナデジダはベラルーシとドイツのNGOの共同経営による民間企業。汚染地区に住む子どもたち専用の保養所とし、ベラルーシで最初に設立した。その後、国家もこのような保養の必要性を認め、同様の保養所が国内に8か所作られました。汚染地区の学校に通っている子どもたちの保養費用は国家負担で行われている（実施率は平均して55-60%）。国の費用だけでは足りない分は、子ども基金のような外国のNGOからの支援や、2005年より一般旅行客を受け入れることによる収入などで賄ってきた。しかし旅行者用宿泊施設は、夏期はほぼ満員となるが、秋・冬は利用が少ない。そこで2005年1月より、親子の保養の受け入れを開始した。これは国のプロジェクトで（保養費用は国が負担）、子どもと引率の親が21日間

（学校単位の保養は24日間）保養をするというもので、チェルノブイリ汚染地の住民に限らず、ベラルーシ全土の住民が対象。我々は1度に24家族の受け入れを開始した。

この家族保養を開始し、いくつかの部門をまとめて人員を減らしたりするなどの見直しを行った結果、2016年からは各国NGOの支援を受けずとも独立して経営できる目処がたった。これまでの子ども基金を含めた各国NGOからの支援に大変感謝している。今後も医薬品やクラブ活動の備品などの支援をいただけるのなら大変ありがたい。

来年でチェルノブイリ事故から30年だが、今後も子どもの保養は必要だと考えている。しかし国からの支援も外国からの支援も減少すると予想している。また、ナデジダから約80キロの所に原発建設が予定されている。これに対して公式には何も言うことができない。しかし我々は、独自の自然エネルギーだけで、原発なしでもやっていけ

ることを証明したい。薪と木のチップを原料とするボイラーフ電気設備を新たに建設した。更に近くの村に2.5ヘクタールの土地を得て、600kW/1日の太陽光発電をする予定。自分たちはそれにより無料で電気を得て、余った電気を国に売る計画をしている。もしこれが実現したら、ベラルーシで初めての、唯一のものとなる。資金集めのために寄付を募っている。

ベラルーシの汚染地は数年おきにモニタリングを行い、（実際の数値に則しているかどうかは別として）汚染地の指定を徐々に外している。これでいくと、国がこれまでの規模で子どもの保養を行うのは2022年くらいまでとみている。特にその頃には、現在、多くの学校が保養に来ているゴメリが汚染地から外されると予想している。そうなると保養人数は極端に減少する。その時に備えて以下の方向を考え、実行し始めている。以下のうち1、2、6は国の予算による保養。

1. チェルノブイリ汚染地の子どもの保養（人数は減少しても最重要と位置付ける）
2. 親子の保養
3. 外国のNGO主催の保養プロジェクト
4. 一般旅行客の受入（独立して経営するために不可欠な収入を得るため）
5. 農業部門（環境に配慮した技術を用いる。自給自足できるように）
6. 障害のある子どもと引率の親のための保養

国内には障害のある子どもを専用に受け入れる施設が一つもないことから、需要は大きいと考えた。すでに施設内の建物の一部に車いす用スロープや、車椅子で利用できるトイレ・シャワー室を設置し、NGOのプロジェクトによる障害児の保養を徐々に行っており、経験を積んできた。我々が今後、障害児の保養を受け入れることに対して国も賛成し、新たな宿泊棟の建設費用を出すことになっている。一般の子ども用・障害児用の屋内プールの建設も予定している。

＜参考：2014年ナデジダでの保養の割合＞

- | | |
|---------------|-----|
| ①汚染地区的学校単位の保養 | 65% |
| ②各国NGO主催の保養 | 14% |
| ③障害のある子どもの保養 | 4% |
| ④一般の旅行客 | 17% |

**アンナ・K 2002年生まれ
ゴメリ市**

未分化大細胞型リンパ腫（悪性リンパ腫）。母親の話。「2014年夏、脇の下のあたりが痛み出し検査を受けたが異常なし」と診断されましたが、その後別の病院で検査を受け、10月末にミンスク市の専門病院で悪性リンパ腫と診断され手術を受けました。今もミンスク市の小児がんセンターで化学療法が続いています。治療の際には自分が付き添います。1クールごとに自宅に戻り、7-10日後にまた治療のため入院します」（訪問時はちょうど治療の合間で帰宅しているところだった）ゴメリ市内の古い2部屋のアパートで、両親、祖父母と5人で暮らしている。アーニヤは治療の副作用で抜けてしまった髪の毛を隠すため頭をスカーフで覆っていた。入院中に習ったという、カラーの輪ゴムで作ったブレスレットや動物の形などをたくさん見せてくれた。アーニヤに必要な薬はすべて無料ではなく、時には家族が自らインターネットで外国から取り寄せている。アーニヤの父親は、チェルノブイリ事故当時、ヴェトカ地区の自分の祖父母の村にいた。その村は事故後、強制移住が行われたという。

**ボグダン・K 2007年生まれ
ゴメリ市**

左上腕軟性組織の悪性腫瘍。祖母の話。「手術をした医師から、も



う少し発見が遅れていたら、腕が動かなくなっていたかもしれないと言われました。手術後、3か月に1回ミンスクの病院に検査を受けに行きました。今は1年に2回、血液検査やレントゲン検査などを受けています。検査に行く時は、朝早く家を出て、結果に問題がなければ、その日のうちに家に戻ってきます。学校は家の近くです。体が弱く、数日通うとすぐどこか具合が悪くなり休む、ということを繰り返します。アレルギーがあり、そのせいで左の耳に問題が起きています。食べ物では、チョコレート、鶏肉、豚肉が食べられません。りんごは青いものだけ大丈夫です。甘いものはなるべく食べさせないようにしています。

チェルノブイリ事故から数日後のメーデーのパレードに、当時6歳の長女（ボグダンの実母）と一緒に参加し、1日中外にいました。ものすごい風が吹いたことを覚えています。娘は14歳から体中に腫れものができるようになりました。そしてボグダンが2歳の時亡くなりました。また、私の息子は手足が不自由です」ボグダンは初めて会う私に人見知りを全くせず、自分の好きな本を見せたり、一緒にゲームをしようと誘ってきたり、とても快活でした。好きな科目は、数学、文学、英語、人と世界（自然や人の体、ものの仕組みなどを学ぶ科目）。ボグ

ダンは祖母を「ママ」と呼んでいた。部屋には亡くなった母親の写真が飾られていた。「ボグダンは最近、“お母さんがいてくれたらなあ”と言うことがあります。それを聞くと、自分の接し方が何かよくないのかしら、と不安になります」と祖母は話した。

ニキータ・Z 1996年生まれ ゴメリ市

母親の話。「ニキータのような病気は、以前は Chernobyl 事故と関係があるといわれていましたが、2009 年 12 月の法改正により、そうではなくなりました。ニキータは何種類もの薬を飲んでいますが、ベラルーシ製の薬は効果がありません。ベラルーシ製の薬でも、風邪薬など簡単なものを除き、完全に無料ではありません。障害者として 10% くらい割引があるくらいです。毎日飲んでいる腸の薬は 1 カ月分で 30 ドル、他の薬は 1 カ月分で 50 ドルです。病院にはまるで仕事のように通っています。外科、心臓外科、精神神経科、胃腸科、内分泌科（甲状腺に問題がある）、整形外科（カルシウム不足で背骨に問題がある）、これらのどこかにいつも通っています。ニキータは、検査に行くたびに新しい病気がみつかり、昨年 12 月も入院しました。

18 歳までは障害児（子ども）年金は 121 ドルでした。18 歳からは障害者（成人）として扱われます。ニキータは第 2 級障害者で年金は 95 ドルです。それまで私は障害児の介護手当 110 ドルを受けていましたが、今後はなくなります。成人したから

といってニキータは病気であることに変わりはないのに、介護はやめて働け、ということなのです。例えば、決まった時間に飲まなければならぬ薬がありますが、私が管理していないとニキータは飲むのを忘れてしまうのです。

ニキータの病気は、脳も、甲状腺も、みんな、Chernobyl のせいだと思います。今、この国では病気の人がとても多いです。Chernobyl 事故のとき、子どもだった人、その人の子どもなども。ニキータが行っていた小児がんセンターには、ベラルーシ各地から病気の子どもが来ています。夫が行っている成人がんセンターも、ものすごい患者。こんなにたくさんがん患者がいるのかと驚きます。

ニキータは化学療法の副作用でひどい吐き気が起こりました。ベラルーシ製の薬は体に合いません。自分でお金を払ってもいいから、外国製の、効き目のある薬にしてほしいです。脳の一番奥にある腫瘍は手術で取り除げず、



まだ残っています。インターネットで、ドイツで特別な治療があることを知りました。でも外国での治療費は自己負担です。何かあった時、助けてくれるのは民間の慈善団体だけです。医師たちは外国での治療のための処方箋を書いてくれません。ベラルーシにはこんな病気の子がいるとか、ベラルーシではこの手術ができない、ということを、外国に知らせたくないからではないかと、私は思います。

（食べ物の放射能について気にしています

か?の質問に対して) 食べ物を放射線測定所に持っていたことは一度もありません。店で売っているものは信用しています。自由市場の瓶詰などは買いません。(日本では一般の人も放射線測定器を持ち土壤の放射能を図ったりしている、という話を聞き) 放射線測定器など、一度も目にしたことはありません。

郊外に菜園があり、野菜を作っています。それがないと生活できません。ニキータは食事にも制限があります。油もの、甘いもの、極端に辛いものを食べてはいけません。また、強い太陽の日差しを受けるのもだめです」

父親は鼻腔の悪性腫瘍の治療を受けていたが、腫瘍はまた大きくなってきたため、数日後には再度ミンスクの病院に行くことになっていると話した。また母親は婦人科の病気のため手術が予定されている。

両親は 82 年からゴメリに住んでいる。母親のラリーサは、チェルノブイリ事故後、奇妙な強風が吹いたことを覚えている、と話した。また、夏には学校からサントリウムに行き、3 ヶ月後にはまたゴメリに戻ったそうだ。

18 歳までは保健省のリハビリセンターに 1 年に 2 回保養に行く権利があり、ニキータはこれまで両親のどちらかと一緒に、3 回、無料で保養を行っていた。また、これまで手術を受けた小児がんセンター(ミンスク市)に治療を行っていたが、今後はゴメリの成人用の病院に行くことになる。しかし母親によると、ニキータは一人で病院に行くのは無理で、彼には誰かが付き添っていかなければならない。「脳の問題のため、ニキータは記憶力がよくあり

ません。でも自立させたいから、何か手に職をつけさせたいのです。上下水道配管工の技術を学べる専門学校に行かせたいと思っています」ニキータもその学校に行きたいと、勉強用の教科書を見てくれた。

家族が暮らしているのは、ゴメリ市内の古いアパートです。両親のものらしい本が、部屋の中や廊下にもたくさん並んでいた。母親は心理学の専門家。「息子の介護があったため、専門を活かして働くことはできませんでした」と話した。

2 年前に「希望」での保養に参加していたニキータは、おしゃべりで、届託がなかった。今回自宅で会ったニキータは、大人になった分、自分の置かれている状況がわかつてきたからなのか、病気のせいなのか、以前より口数が少なく感じた。病気の子どものいる家庭には、父親が家族を捨てて出て行ってしまったり、母親がアルコール依存症のため子どもの世話をしない、などのケースもある。ここではニキータの両親が息子をとても大切に思っていることが救いだった。

ダニーラ・G 2007年生まれ モーズィリ市

腎臓がん。現在もミンスクの小児がんセンターで化学療法が続いている。これまで 12 ブロックが終わり、さらにもう 1 ブロックの治療が予定されている。訪問した日は治療の合間で、自宅に戻ってきていたときだった。

母親の話。「ダニーラは昨年(2014 年) 9 月の小学校入学前の検査で、腎臓がんが発



見され、手術を受けました。幼稚園の卒園式も、小学校の入学式にも出られませんでした。手術後も治療が続き、家と病院を往復する生活です。入院中は私が付き添います。病院での治療費と子どもの食事は無料です。薬も無料ですが、処方されたベラルーシ製の薬が体に合わないときには、外国製の薬を買うこともあります。付添いの親たちは食品を買ってきて自炊しています。病院への往復の二人分の交通費も大変です。私は以前、店員をしていましたが、いまはダニーラの介護のため働いていません」

ダニーラ治療の副作用で髪の毛が抜け、治療の影響で大分痩せてしまった、と母親は話した。病気になる前の写真は、もっとふくらした様子だった。実の父親は養育費を払っておらず、何の連絡もない。義理の父親（母親の2番目の夫）はロシアに出稼ぎに行っている。ダニーラは彼を「パパ」と呼び慕っている。弟のチムール（3歳）は、生まれつき体が弱く、喘息があり、病弱な子ども専用の保育園に通っている。祖母（母方）が近所に住んでいて、よく助けてくれるという。「治療を受けている小児がんセンターには、外国からの支援でぬいぐるみや文房具などをもらえることがあります。文房具などは保管していて、学校に行けるようになったら使います」と母親は話した。

ポリーナ・M 2005年生まれ ジロービン市

日本の里親からの支援を受けていた一人の女の子が10歳で亡くなった。

ポリーナは2006年に目の腫瘍の手術、2010年には腎臓がんの手術を受けた。その後は回復して、1度だけ「希望」の保養に参加したが、

保養の数日後に体調を崩して病院に運ばれ、自宅に戻った。その後、頸の骨の肉腫が現れ、4回の手術と化学療法を受けたが、今年（2015年）2月に亡くなった。頸の腫瘍は、亡くなる前には顔と同じくらいの大きさになっていたという。5月、ポリーナが所属していた慈善団体「困難の中の子どもたちへ希望を」代表のポホモワさんと共に、ジロービン市郊外のお墓と、自宅を訪れた。母親はポリーナの写真を見せながらぽつりぽつりと話し始めた。「病気が見つかり治療が終わると、また次の病気。でも、いつも適切な時に治療してきたのに、どうしてこんなことになってしまったのか…。家に帰ってくると、あの子がまだそこにいるような気がして。あの子がいない生活に慣れることはできません」と涙を流した。帰り際、ポリーナの兄が、私たちと写真を撮りたいと言った。「妹を助けてくれた人たちだから」と。

（写真：ポリーナのお墓と母親）



~~~~~

その後、8月にポホモワさんと会ったとき、やはり以前里親の支援を受けていた男の子（18歳）が亡くなったことを知らされた。脳腫瘍の手術を受け、治療もしてきたのだけれど、最後は助からなかった。「手術も治療も終え、よくなってきたと安心していても、再発することもある。支援してきた子どもが亡くなるのは辛く、残された家族の気持ちを考えるとさらに辛くなる」と話した。



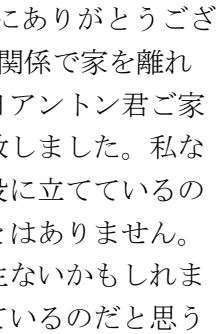
# 里親のページ

## << 里子の家族からの手紙 >>



娘のナースチャは知能の面でとても大きな進歩がありました。質問に対して何か答えようしたり、自から何か話そうとするようになりました。勿論まだ何を言っているのか、全部はわかりませんが。夏の初め、リハビリセンターに行きました。短い課題をする中で、彼女が何か言おうとしたり、多くのことを理解していることに教育者は気づき、とてもほめっていました。また以前より足取りもしっかりしてきて、彼女を支える時間が前より短くなりました。それに強く何かをしたいと思うときなど、走ろうとさえするようになりました。この間、かかりつけの神経科医のところに行ったとき、医師は2種類の薬を処方しました。「私たちはもう娘にそれらを飲ませていて、次は別の薬を試そうとしている」と話すと、医師は「それは正しいことです、娘さんの頭がはっきりし始めているのが明らかです」と言いました。私はそれを聞いて、もし医師がその薬の効果を知っていたならなぜもっと前に私たちに教えてくれなかつたのだろうと怪訝に思いました。私たちは自分で調べてそうしたのですから。娘があなたのために作った絵葉書を送ります。（ベルーシ・ミンスク市ダヴィドフスカヤ家より）

## << 里親からの手紙 >>



大変嬉しいご連絡を本当にありがとうございます！普段は仕事の関係で家を離れていますが、月曜休みの昨日アントン君ご家族からのプレゼントも確認致しました。私などが多少なりとも、人のお役に立てているのであれば、こんな嬉しいことはありません。里子の方々と会う機会は一生ないかもしれません、どこかでつながっているのだと思う

と、なんか自分も救われる気がします。写真の笑顔の影には大変な苦労ときつさがあるのだろうと思います。いくら支援をしているといつてもどうしようも出来ないこともあるかと思うと歯がゆい気がします。ただただ、彼とご家族が少しでも幸せな時間を過ごせることを祈るばかりです。（岐阜県Sさん）<事務局スタッフが現地を訪問の際、里子本人や、所属する現地団体などから、里親の方宛てのお手紙やプレゼントを預かることがあります。上記はそれを受け取られた里親の方からのメールです。>

~~~~~

アレクサンドルさんが、よい人生を歩まれていることを知り、とても嬉しいです。スポーツもされ、3歳の娘さんがいらっしゃるんですね。いただいた結婚式の写真は私の宝物として大切にします。お二人ともとてもよいお顔をされていますね。美しい奥様とかわいい娘さんと共に、ますます幸せになられますこと心より願っています。あれからどうされているのか気にかかっていましたので、この知らせは私たちにとっては、神様からのプレゼントのような嬉しい知らせでした。連絡どうもありがとうございました。感謝！（東京都Tさん）<現在、別の里子を支援しているTさんとお話をした際、過去に支援していた里子はどうしているのかと気遣っておられました。その子どもが所属していたウクライナの団体はすでになくなっていましたので、当時の担当者に問い合わせたところ、数ヵ月後に里子本人から連絡がありました。現在は結婚して1児の父親になっていると、写真も送られてきました。「自分が一番大変だった時期に支援していただいたことは決して忘れません」という感謝の言葉がつづられていました。>

~~~~~

※前号でご紹介したベルーシのエフゲニ君（5歳）には支援してくださる里親が決まりました。

## ウクライナの青年ウラディスラフへのご支援のお願い

チェルノブイリ子ども基金では、甲状腺手術後の困窮家庭の子どもを対象に、日本の里親が月 50 ドル相当を支援する「里親制度」を、98 年より実施しています。現在は甲状腺以外の病気の子どもも対象になっています。これまでに 279 人が、現在は 66 人が里親からの支援を受けています。里親が見つかるまでの間、子ども基金の募金の中から「緊急支援」として支援することもあります。

2011 年に子ども基金が「緊急支援」をした、ウクライナの青年ウラディスラフ（ジトーミル州・オヴルチ市／1995 年生まれ）から、メールが届きました。彼は慢性腎機能不全のため血液透析を受けており、薬代、通院代などが重い負担になっているといいます。ウラディスラフは、腎臓移植手術を希望していますが、ウクライナの病院や慈善団体に支援を訴えても援助が得られず、子ども基金に助けを求めてきました。親族は適合する人がみつからず、死体移植しか方法がないとのことです。手術費用は 60,000 ドル（約 722 万円：10/6 レート）と高額で、子ども基金の力だけではすぐに支援できるものではありません。また費用ができたとしても、臓器提供者が現れるまでは、いつ手術を受けられるかわかりません。そのため子ども基金では、せめて血液透析の治療費の一部でも支援していきたいと考えています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。（ご支援いただける場合は「ウクライナの青年の治療費用」とご記載ください。）

= \*= \*= \*= \*= \*= \*= \*= \*= \*= 「自分の病気の、解決法のない状況についてお伝えしたいと思います。以前、あなたがオヴルチの僕の家を訪問された時、僕は自分の病気について全てを理解しておらず、また、「生命」という言葉に価値を見出すことのない子どもでした。でも今はただ神様と善良な人々に祈るのみです。

僕の病気は、急性腎不全を伴う、急性腎感染症、溶血性尿毒症症候群の後の、慢性腎臓機能不全

4-5 段階です。1998 年から、チェルノブイリ事故による障害児と認定されています。1996 年から代謝疾患センター”Okhmat”（キエフ市）で治療を、2000 年から第 7 小児病院腎臓科（キエフ市）で治療を受けました。2013 年から”Okhmat”で血液透析を、現在はキエフ市第 1 小児病院で血液透析を受けています。

僕は緊急に腎臓移植をする必要があります。体調は日に日に悪くなっています。検査の結果、親類の腎臓はみな不適合でした。ウクライナでは亡くなった人からの腎臓移植が許されておらず、訪れた病院ではどこでも断られました。最後の望みはベラルーシで手術をすることです。ベラルーシ大統領に支援を願い出ました。ベラルーシ保健省からの返信でわかったことは、ミンスク市の第 9 病院で腎臓移植手術が行われているということでした。外国人の場合の手術代は 65,000 ドルです。

本当に悔しいことですが、僕たちにはそのような大金はありません。ベラルーシの病院で手術を受ける申請するための費用さえありません（※）。このような健康状態のため、僕は働いていません。両親は年金生活者です。このような大金を準備することは、僕たちには不可能です。僕が今、週 3 回受けている血液透析の費用に、ほとんどのお金が使われています。ウクライナは軍事的・政治的状況の困難、インフラ、経済危機にあります。この国では、自分の病気のことは自分でなんとかしろ、と見捨てられたようなものです。

どうかベラルーシで腎臓移植手術ができるように、助けてください。心からご支援をお願いします。僕は「生きたい」のです！

ウラディスラフ・ポロシン

2015 年 6 月 2 日

（※その後 5000 ドルを支払い、手術前の検査を受けました。検査で甲状腺の問題も見つかりました。）





## ベラルーシの学校の放射線教育について

小寺隆幸（チェルノブイリ子ども基金理事・京都橘大学）

8月後半、教育研究者と教師10名でベラルーシの学校とナデジダを訪問した。佐々木さん(\*1)にコーディネイトから通訳まで全て引き受けさせていただいたからこそ実現した旅だった。

私たちは2011年春以降、原発安全神話を支えてきた教育の責任を痛感し、汚染されてしまった日本での放射線教育のありかたを考えるために東京学芸大学で隔月に研究会を行ってきた。その一環としてベラルーシでの放射線教育と保養の現状を知るために今回訪問した。夏休み中で授業を見ることはできなかったが、先生方から話を伺うことができた。

ベラルーシでは事故の前から「安全の基礎」という教科があり、小学校低学年から11年生まで教えられていた。これはチェルノブイリ事故後の一時期「放射線と安全」という名称となっていたが、今は火事や自然災害、そして誘拐・犯罪・交通事故などの社会的なリスクから身を守るための教育とされ、その中の1単元として放射線を扱っている。この授業は6年前から必修となった。

低学年用の教科書では、放射能マークのある森には入らないこと、きのこなどは気をつけることなど、生活に密着した基本的なことを扱っている。ただミンスクの学校の9年生の花田君(\*2)は、「安全教育」は担任任せで自分の先生はあまり熱心に扱わなかった、と語った。一方、9年生のテキストには、事故後の汚染地図や甲状腺がん発症のグラフ、そして物理の数式などかなり詳しく書かれている。ただこれは学校選択科目で、どの程度の学校が実際に教えているのかは不明である。花田君が通うギムナジウム(\*3)を訪問した。そこはエコロジー・ギムナジウムで、ユネスコの“持続可能な開発のための教育(ESD)”のベラルーシにおけるリソースセンターだった。ESDの4つの原則は「生命共同体を敬い配慮する、環境保全、社会的経済的公平性、民主主義」であり、また子どもたちが自分の健康を管理すること、そのためにリハビリを

“予防的に健康を維持すること”と捉え重視しているとのことだった。29年後の今も汚染地の子どもたちの保養を行うことの基礎にこのような考え方があるのだろうか。一方、福島の子どもたちはこのような健康への権利が保障されていない。日本が大いに学ぶべき点だろう。

ゴメリでは4つの学校を訪ねた。町はずれの森の入り口には放射能マークの標識が立つところもあるが、市内は線量も低く、教師たちもそれほど気にしていないという。近郊の村の小学校の校長に話を伺った。そこに汚染地域から通う子どもたちは全校の4分の1の27名。この子たちは教師が付き添って年1回24日間サナトリウムに行く。こんな小さな学校でも、保養に行く子と行かない子がいるという事実も考えさせられた。

29年経ってもきのこなどの汚染は続いている。自給自足の農村地帯では、汚染されていても食べる人も多い。そこでナデジダでは、保養に来た子どもたちに放射能についてのワークショップ型授業を行っている。子ども基金が招待した特別保養の子どもたち(\*4)の授業を見学した。どのような食べ物が放射能を取り込みやすいかなどを、子どもたち同士で話し合いながら深めていた。福島でも日本全体でも、このような授業をこれから長期にわたって実施していかねばならないと感じた。

今後テキストを翻訳し詳しく検討して、日本でのこれから放射線教育が学ぶべき点を明らかにしていきたい。

~~~~~

*1：子ども基金スタッフ。 *2：ミンスク在住。以前基金ニュースで「ミンスク便り」を執筆した花田さんの息子さん。 *3：ベラルーシでは1～4年次が日本の小学校、5～9年次が中学校、10・11年次が高校にそれぞれ相当する。一貫教育の学校が大半であるが、5年次からは試験に合格すればより教育内容の充実した「ギムナジウム」に進学することもできる。 *4：本号3・4頁参照】



<遺伝子とがんの話>

今、遺伝子の研究がさかんですが、同じ遺伝子を持っている人がいても、発病する人としない人がいることを見落としています。

既に同定されて判っている遺伝性病因遺伝子の病気の中の腫瘍類には、子どもの網膜芽細胞腫（乳幼児のがん）、ウィルムス腫瘍（腎臓の悪性腫瘍の一つ）、若年性乳がんおよび若年性卵巣がん、神経線維腫症、のう胞性線維症、家族性黒色腫、多発性内分泌腺腫症、遺伝性非腺腫性大腸がん、多発性のう胞腎、などがあります。

また白血病を起こすウイルスや、子宮頸がんを起こすウイルス、肝臓がんを起こすC型肝炎ウイルスなども知られています。がんになる仕組みには、いろいろあり、一言ではいえませんが、ウイルスにかかるっても、遺伝子を持っていても、必ずしもがんになるとは限りません。

ある腫瘍の原因とされるウイルスには腫瘍遺伝子があります。これは、ヒトにも存在しています。この腫瘍遺伝子の働きは、細胞の成長を促進することで、これがあるから胎児が子宫内で成長したり、体に傷ができるても治ります。それが傷の肉芽の成長を促し、きれいに元通りになった所で、その指令を止めるから、傷の治癒の仕組みがちょうど良い所で止まり、傷ができた所も判らなくなるように治ります。その傷を治す働きを止める指令がでるのが遅るとケロイドになり、肉芽が盛り上がって治ります。ところが、誤ってオンになつたままになると「ガン化」するのです。

遺伝子発現には、強力な調節システムが存在しています。遺伝子には、調節領域があり、それに指令が組み込まれ、自動的に、遺伝子をオンにしたり、オフにしたりしています。それがうまく働いていると、傷がきれいに治ったりします。また、ここに情報が外部から入力されて遺伝子にオン・オフの指令が出され、遺伝子の指令で蛋白質が作られ、その蛋白質が情報として出て行き、指令を伝達します。遺伝子はあるだけでは働く、スイッチが入ると機能します。その働きをしているのが、今までにジャンク（がらくた）遺伝子と呼ばれていた、働きの分からぬ多数の遺伝子た

ちと考えられるようになりました。その眠っている遺伝子を動かすのが、環境要因（外部の自然環境、社会環境、内部の心理的、情緒的環境、さらに自分の意志）です。ここに放射線や発がん物質も入ります。

またある遺伝子は環境条件に左右されます。ある種の環境でなら、ある形で発現します。

遺伝子は、もともと特定性（発達や環境に左右されない性質）と可塑性（環境の変化に適切に対応する能力）とを持っています。遺伝子と環境とは相互に影響しあうのです。ですから、がんは多因子疾患、つまり複数の遺伝子と環境因子によって発病する病気に分類されています。遺伝子と環境のせめぎあいで発病するのです。そこにストレスや性格が加わります。そこで「がん性格」という考え方も出てくるのです。

ヒトは、がん促進遺伝子、つまり腫瘍遺伝子も、がん抑制遺伝子もいくつも持っています。がん抑制遺伝子は、腫瘍抑制遺伝子と言って、細胞分裂を一斉に止めて、がんのように成長する可能性のある遺伝子部位の芽をつみとるのです。判りやすく言えば、ガン化するのを止めるブレーキです。第17染色体上にある一つの腫瘍抑制遺伝子はp53と命名されており、この遺伝子の変異は、人のがんの約半分に関与していると言います。肺、乳房、結腸、食道、膀胱、胃、脳、骨などにできる悪性腫瘍を操作していると言われています。様々な障害が腫瘍遺伝子に襲いかかります。しかし、またDNA修復遺伝子もあり、日常的に起きる染色体の異常を修復するように動いています。この遺伝子の障害もがんにつながります。

しかし、幸いなことに、発がん過程は長く複雑であり、発現するまでに長い時間がかかるので、その間のどこかの時点で抑え込むことが可能なので、発がん物質を取り込んだり、放射線をあびたりした誰もが、がんになることはないのです。

まだまだ、遺伝子とがんの話はつきませんが、今回はここで終わります。

黒部信一：すずしろ診療所所長 小児科医師
ブログ：<http://blog.goo.ne.jp/kuroshin1941>

2016 チェルノブイリ 30周年救援カレンダー

“母から子へつなぐ 命・希望”

(撮影 広河隆一)

完成しました!
お申込み受付中!!

1983 年にベラルーシのゴメリ市で生まれ、甲状腺の手術後、薬を飲み続けながら、就職、結婚、出産を経て母親となったナターシャ。現在はミンスク市で夫と二人の息子と暮らしている彼女の人生の節目を切り取った写真と、「沖縄・球美の里」(福島の子どもたちのための保養施設・沖縄県久米島町)で保養をする福島の子どもたちの写真で構成されています。各月の小窓には、ベラルーシのチェルノブイリ被害者家族の写真が掲載されています。ご自宅用に、職場用に、またプレゼント用にも最適です。どうぞ周りの方々にも広めてください。※カレンダーの収益はチェルノブイリと福島の原発事故による被災児童のための救援金にあてられます。



2016
Chernobyl 30th Anniversary
Photo Calendar

母から子へつなぐ 命・希望

Photo: Hiroki Nagano

●定価 1100 円 送料別 (6 部まで 200 円、7 部~9 部は実費) ※10 部以上: 1 部 1000 円／送料無料 ●お支払方法: お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください ●カラー、サイズ: 縦 42cm×30 cm、見開き A3 サイズ ●デザイン: スタジオ・ギブ
<申し込み先> チェルノブイリ子ども基金

T/F : 03-6767-8808 E-mail : cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

チェルノブイリ事故 10 年目から広河隆一さんの写真でカレンダーを制作・販売してきました。おかげさまで毎年大きな収益が生まれ、子どもたちのための救援費用となっています。事故から 30 年、福島原発事故から 5 年目の 2016 年カレンダーはどうしようかと相談の結果、割と早い時期に中心となる写真の主を決めていました。ナターシャ・コンツェヴェンコです。今年 2015 年版カレンダーの表紙はナターシャ親子でした。それなのにまた 2016 年も?と思われる方もいらっしゃるかもしれません。

ご存じと思いますが、福島では小児甲状腺がんが多発しています。被ばくした子どもたちや親ごさんたちはどんなにか不安なことでしょう。甲状腺がんの手術を受けたベラルーシの少女が、成人し、結婚、出産して、母親になっている姿を見てもれば少しでも励ましのメッセージになるのではないか。そして病気を早期に発見し、定期的に検査を受け、治療を続けることの大切さも伝えたいと思いました。

ナターシャは 13 歳の時に手術を受け、15 歳の時 チェルノブイリ子ども基金の招待でサントリウム

「希望」で保養、さらに子ども基金・奥羽支部の招待により来日しています。当時 (1998 年夏) の写真もカレンダーの最後の頁に載っています。

また、滞在中の大部分を過ごした岩手県奥中山教会の写真も載っています。母親と共に約 1 か月、文字通りの保養をしたのです。帰国後、「毎日が夢のようでした」という手紙が届きました。そして彼女は今でも、その時の思い出の品やもらった手紙を大切に保存しています。「日本で過ごした日々、出会った人々のことを思い出すと心があたかくなる」と言います。基金ニュースレター

(No. 35 / 98 年 12 月号) に、当時ナターシャと交流した奥羽支部の人たちの声があります。「ナターシャは海で泳ぐのは初めてとのことで、一日中三陸海岸で遊びました。海の水はしおらしく、波がある等、生まれて初めての海水浴に夢中でした。浜できれいな石を拾い、パパのお土産にと沢山持って帰りました」これを読んで、沖縄・久米島の保養施設「球美の里」に来る子どもたちを思い出しました。福島にも海はあるのに、久米島に来て初めて海に入るという小さな子どもたちがいます。また以前は海水浴をしたけれど今はプールだけという子どもたちなど、久しぶりの海水浴にはしゃぎます。福島の子どもたちもお土産に石や貝を拾って帰ります。その福島の子どもたちの写真もカレンダーに掲載しています。ナターシャの今のように、みんな元気に大人になってほしい、と心から願わざにはいられません。

＊＊＊＊＊＊＊＊ 募金・救援状況 ＊＊＊＊＊＊＊＊

●募金状況

2015年6月～9月

(単位:円)

	6月	7月	8月	9月
募金件数	130件	163件	43件	33件
救援寄付金	711,455	506,930	154,247	74,200
保養費	71,000	78,300	18,000	76,000
特別保養費	105,000	140,000	-	1,137,700
里子支援	12,950	2,252,320	172,410	144,760
ニュース購読費	42,000	30,000	8,000	8,000
イベント賛同金	-	3,000	-	-
合計	942,405	3,010,550	352,657	1,440,660

★ベラルーシの子どもの保養 (本文3-4頁参照)
費用の一部としてパレスシステム東京さんから
1,137,700 円の平和カンパをいただきました。

★寄贈品のお礼: 三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金様、飯吉正志人様、中嶋恵實子様よりご寄贈のタオル(右上写真)、ストラップ、

手作りカードは、8月に保養中の子どもたちに手渡されました。藤田進様よりご寄贈の大相撲カレンダーはベラルーシの「希望」に、黒子弘一様よりご寄贈のスポーツウェアは現地団体に手渡されました。富永安子様よりご寄贈の「くみひも」製作材料により、事務局スタッフが「希望」で保養中の子どもたちに教室を開催しました。他に葉書・切手4,090円分、商品券1,000円分のご寄付をいただきました。まことにありがとうございます。

●救援状況

2015年6月～9月

(単位:円)

＜ウクライナ＞

◎子どもたちの生存

里子支援 12人(2015年7～12月分)

489,243

緊急支援 2人

87,829

＜ベラルーシ＞

◎希望

子どもの保養費

2,751,346

年間保養費の一部 後半分

1,452,440

◎困難の中の子どもたちへ希望を

里子支援 51人

1,897,150

(2015年7～12月分、4～9月、9～12月分)

緊急支援 1人

37,611

スタッフ給料(2015年7～12月分)

151,392

◎ Chernobyl のサイン

里子支援 1人

75,696

(2015年7～2016年6月分)

医薬品

31,540

♥ 募金団体名一覧 ♥

(順不同・敬称略) 紙面の都合上個人名は省略させていただいております。
ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。【6月】トランスフェリックマネジメント【7月】トランスフェリックマネジメント／三重・チェルノブイリ被曝児童救援募金／リサイクルグループ カリーナ／ケイ歯科クリニック／自治労日野市職員組合／チェルノブイリ子ども基金奥羽／ヒーリングスペースレイ／【8月】トランスフェリックマネジメント／イエス・キリスト教会 祈りの家／【9月】実教出版 放射能俱楽部／生活共同組合パレスシステム東京 平和カンパ



～～～ チェルノブイリの歌声 ～～～

◆(前号ニュース) 平野進一郎氏のベラルーシ・ウクライナ保養についてのレポート、興味深く読みました。(山梨県 Kさん) ◆4/24講演会・チャリティコンサートの感想を読み、次回は参加したい気持ちになりました。いつも文章を読み、被曝の恐ろしさを再認識しています。(東京都 Mさん) ◆(カレンダーの)ナターシャの幸せそうな微笑には希望を感じられます。福島の子どもたちも、将来同じような笑顔を持てる事を願います。(愛知県 Sさん)

<6/26 パレスシステム東京／大田区上池台委員会・学習会の感想(講演:向井・佐々木)> ◆福島の事は気になりながら少し遠のいていたのですが、改めて「進行形」であると聞いて気が引き締まりました。貴重なお話しを有り難うございました。

◆福島の事故が忘れ去られた様な現状の中、チエルノブイリで未だおきている事を見ていくことは日本の今後起きるであろうことが見てくると思う。多くの人々に伝えていくことが大事だと思う。◆チエルノブイリ原発事故から29年も経っているのに未だに甲状腺ガンをはじめ色々な病気が有り、減っているわけではない事に驚きました。日本も福島原発事故の事を考えると、未来の事を真剣に考えなければいけないと改めて感じました。◆チエルノブイリの現状を知り日本も他人事ではないことを悲しく思う。自分の判断、責任において生活していくなければならない。◆大切な事なのに昔の事、他人事の様に思ってしまっている自分がいました。今日写真や数字を目で見て感じる事が出来て良かったです。賢い母になって出来ることをしていきたいです。知らないって怖いですね。

事務局から

■ 映画「広河隆一 人間の戦場」～フォトジャーナリスト 広河隆一の軌跡。パレスチナ、 Chernobyl、福島、沖縄・久米島へ。監督・長谷川三郎。12/19(土)より新宿ケイズシネマほか全国順次公開！～ Chernobyl子ども基金を設立、雑誌 DAYS JAPAN を創刊、沖縄・球美の里を設立した広河さんを追ったドキュメンタリー映画です(今号にチラシ同封)。2016年 Chernobyl救援カレンダー表紙の、ベラルーシのナターシャも映画に登場します。またこの映画の Chernobyl 取材のアレンジ、ロシア語字幕翻訳に当基金の佐々木真理が協力しました。お近くの映画館で上映の際はぜひご覧ください。※お問合せ：東風(トウフウ) T/03-5919-1542 (平日11時～18時) E-mail: Info@tongpoo-films.jp

■ 広河隆一さんの後を引き継ぎ、当基金理事の向井雪子が「沖縄・球美の里」代表に2015年8月就任しました。今後も Chernobyl と福島の子どもたちの支援活動に関ってまいりますのでよろしくお願ひいたします。

■ ボランティア募集 ニュース発送作業(年3回:2・6・10月) 次回 2/20(土)午後1時～4時頃まで 場所: 東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階)※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにご連絡ください。【問い合わせ】平日午前10時～午後5時 留守の場合は伝言をお願いします。T&F03-6767-8808

■ 映画「小さき声のカノン」4/24 子ども基金のイベントでご講演いただいた鎌仲ひとみ監督のドキュメンタリー映画が全国各地で上映されています。お近くの方はどうぞご覧ください。(ベラルーシのシーンのロシア語字幕翻訳に当基金の佐々木が協力しました。) ☆10/28 スペースオルタ・横浜市／やまと郡山城ホール・大和郡山市 ☆10/31 たきかわホール・滝川市 ☆11/8 練馬区立区民産業プラザ・ココネリ ☆11/14 くにたち芸術小ホール・国立市 ☆11/21 奥羽キリスト教センター・岩手県 ☆11/27 練馬区立生涯学習センター ☆11/29 横須賀市勤労福祉会館 ☆11/29 高松市男女共同参画センター ☆12/20 うたごえ喫茶ともしび・新宿区 ※お問い合わせ (株)ぶんぶんフィルムズ T/03-6379-3938 (平日11時～18時半) E-mail: info@kamanaka.com

■ Chernobyl 30周年イベント 2016/4/23(土) 練馬文化センター(東京都練馬区)にて講演会・チャリティコンサートを企画しています。出演者・内容が決まり次第みなさまにご案内いたします。

■ 「基金ニュースレター」について 募金をくださった方には、使途の報告として基金ニュースをお送りしています。また、ニュース購読費(2,000円/年)も募っています。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースレターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)

* * * ご協力いただいているみなさまへ * * * いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください 郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれたり判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入用の際はお申し出ください。



★次号のニュースレターは2016年2月発行のため、今年みなさんにニュースをお届けするのは今号が最後です。今年2月に移転した新事務所にもすっかり慣れました。都心から遠くなりましたが、家賃が格段と安くなりましたので助かっています。今年1年皆さまからのあたたかいご支援をほんとうにありがとうございました。来年もどうぞよろしくお願ひいたします。(事務局スタッフ・理事一同)

● Chernobyl 子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行 ●
〒177-0035 東京都練馬区南田中2-7-7 Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト http://homepage2.nifty.com/chernobyl_children/index.html

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。